

Monthly Report

 SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS

Vol.165 / 2020.JAN
(月1回発行)

尚絅学院大学と連携協定を締結しました



写真左から尚絅学院大学の合田隆史学長、佐々木公明理事長・学院長、本学の朴澤泰治理事長・学事顧問、遠藤保雄学長

く 目 次

・尚絅学院大学と連携協定を締結しました	1
・学生たちが取材協力／ミニコミ紙で地域貢献賞 ・令和元年度 学生相談室・修学サポート委員会共催 教職員研修会「変容する学生と学生指導、担任教員にできること」	2
・ハノイ首都大学訪問報告 ・令和元年度 仙台大学第6回学術講演会を開催しました	3
・芝草通信 NO. 10 ・「高校スポーツの安全を守る」 Vol. 22	4

1月10日（金）、本学は、尚絅学院大学と連携協定を締結しました。

イオンモール名取3階にある尚絅学院大学地域連携交流プラザで締結式が行われ、本学からは、朴澤泰治理事長・学事顧問、遠藤保雄学長、高橋仁副学長、青沼一民副学長、渡邊一郎事務局長が、尚絅学院大学からは、佐々木公明理事長・学院長、合田隆史学長、赤坂和昭副学長、木村清副学長、佐藤修二事務部長が出席されました。

両大学は、共に宮城県南部に位置し、地域における健康福祉、教員・保育士分野の人材養成において大きな役割を果たし、地域における生涯学習や健康福祉の増進にも寄与しています。本協定は、これまで培ってきた互いの特色を活かし、教育研究活動や地域貢献活動を更に推進していくことを目的としています。

今後本協定に基づき、より良い教育研究活動や幅広い地域貢献活動を行っていくようさまざまな事業に取り組んでまいります。

＜報告：事業戦略室＞

シッティングバレーの普及活動を開催しました

1月12日（日）、尚絅学院大学との連携協定締結記念イベントとして、仙台大学・尚絅学院大学の女子バレー部によるシッティングバレーの広報普及活動を開催しました。

普及イベントは、中学校のバレー部の大会である「第20回尚絅カップ」に引き続きの開催だったこともあり300人を超える多くの皆さんにご来場いただきました。

当日は試合の様子をWEB中継でも配信し、たくさんの方々がシッティングバレーの魅力を感じたことでしょう。

＜報告：スポーツ局＞



プレーやルールの解説も行われ、よりシッティングバレーの魅力が分かる試合となりました

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツ情報マスマディア学科：学生たちが取材協力／ミニコミ紙で地域貢献賞

本学スポーツ情報マスマディア学科の学生たちによる取材・執筆の協力で、河北新報船岡販売所（千葉和雄所長、宮城県柴田町）が毎月2回発行するミニコミ紙「オアシス」が、2019年度「日本新聞協会 地域貢献大賞」の地域貢献賞に選ばれました。全国から57件応募があり、このうち26件選ばれたなかの一つです。

オアシスは1994年創刊です。販売エリアに本学があり、本学学生たちも積極的に新聞作りをお手伝いしてきました。取材は格好の学びでもあります。小学校の入学式、中学校の体育大会、老人ホームの慰問、わが家のペット自慢…。地域の出来事を、学生たちはカメラを肩に追いかけています。沼田美咲（1年）は「街の人に取材していると、いろいろ勉強になる。今後も続けていきたい」と意欲的です。

紙齢800号に届こうとする同紙は毎回4500部発行。千葉所長は「これまででも、これからも仙台大学の学生さんたちの力が頼り」と期待を口にします。皆さん、柴田地域に来られたときはオアシスを飲食店などで手にしてみてください。「仙台大学」が見えてきますよ。

＜報告：スポーツ情報マスマディア学科＞

夏祭りを取材した後に記念写真を
パチリ。左から中山美里、沼田美
咲、納代真奈



地域の話題を伝えるミニコミ紙
「オアシス」



令和元年度 学生相談室・修学サポート委員会共催 教職員研修会 「変容する学生と学生指導、担任教員にできること」

令和2年1月21日（火）LC棟において、令和元年度学生相談室・修学サポート委員会共催教職員研修会を開催しました。東北大学名誉教授の吉武清實先生より「変容する学生指導、担任教員にできること」をテーマに講演いただき、教職員と教員志望の学生37名が参加しました。

吉武先生は日本学生相談学会の会長を歴任され、現在も学生相談室の相談員やスーパーバイザーをされている、学生相談に関する第一人者として大変著名な先生です。今回はテーマをもとに「今どきの学生像」、「担任教員としてできることは何か」という2つの観点からご講演頂きました。

調査研究から明らかになった学生像として、最近の若者は「いつも友人と連絡を取っていないと不安」、「友だちというより一人でいる方が落ち着く」との回答割合が高く、友人関係に多くの不安を抱いている、その背景にSNSの影響が考えられる。親子関係では、情緒的にも経済的にも子が親に依存する傾向が高まった結果、若者は親の支配を受け、自分のしたいことを通すよりも親の勧めに従うため、意欲向上に繋がらない。また、「努力しても報われない」と感じる若者が増えている。かつては校内や地域で上位にいたが、大学など外の世界に出ると、自分よりさらに上位の存在に出会うため目標を失い、挫折する。それを挫折で終わらせず、学生が目標を再設定すること、そのサポートが非常に重要であると、データを示しつつお話し下さいました。

吉武先生は相談活動実践の中でも、最近の若者は劣等感を強く持ち、叱られると怯んでしまいがちで、その背景には叱られた傷を癒す人間関係が形成されていない特徴があると強く感じていると話されていました。教員から学生に必要なことを伝える際には、その伝え方に配慮し、本人に納得のいくような説明をすることが求められます。学生が「切り捨てられた」と感じてしまうと、そこに恨みが生まれてしまう可能性があること、また、「お前はダメだ」と言われてしまうと「どうせダメだから、どんどんダメな方へ行ってやろう」という感情が湧く可能性も指摘し、うまくできない・失敗してしまった学生を切り捨てるのではなく、チャンスを与えることが必要であり、それこそが教育であると強調していました。

担任、教員として、気になる学生を心にかけ、見守る必要があり、タイミングを見て働きかけをします。そのタイミングや方法は難しいものの、自分だけで抱え込まずに同僚や学内の援助資源を活用しながらあたっていくこと、学生に接する際は相手をリスペクトする姿勢で接していくこと、身近な存在だからこそ人間関係を構築していくのは非常に難したため、学生の多角的な理解と構えを持つことが重要と話していました。

今回の講演は、学生の特徴や担任として対応する際の留意点について学習でき、再考する機会となりました。今回の講演が、今の学生の在りようを捉える糸口となり、目の前にいる一人の学生を理解し、より良い教育をしていくための一助となればと考えています。

＜報告：学生相談室＞



I. 「今どきの学生」像から

- ・諸行無常、価値構造・社会構造の変容とあいまって
は他と並び変わっています。若者の考え方や行動
も変化している。各種調査データから、
相談の課題が豊富化している。
・もちろん、学生たちは名前をつけて
これを前提としている。しかし、この理解が適切で
ある傾向が増しています。
・参考文献：中島正樹「今どきの学生像」、特別支援
教育研究、アーティクル、2018年1月号「今どきの
学生像」から。
<参照2> : <http://rkt.k.u-tokyo.ac.jp/>



東北大学名誉教授の吉武清實先生

ハノイ首都大学訪問報告

令和2年1月4日（土）ベトナム社会主義共和国の首都ハノイ市にあるハノイ市立ハノイ首都大学を訪問し、国際交流協定締結の打合せ・締結セレモニー及び市内の3つのキャンパス視察を実施しました。

昨年11月に同大学訪問の際、同大学の教育学部学生の仙台大学大学院受入および同大学に新設されたスポーツ健康科学学部との交流等について打合せを実施し、これに基づき、ハノイのノイバイ国際空港近辺に整備されたスポーツ健康科学学部キャンパスを視察の上、国際交流協定締結に向けた動きとなりました。



新キャンパスは、同国際空港から車で10分程度の場所に整備されており、短期滞在施設も設置されていました。

ベトナムは1月初旬も通常学業期であり、土曜日も日本語学習カリキュラムの授業が実施されていました。

日本語学習では、日本語習得のみならず、右の写真のように、「報連相(ホーレンソー)」など日本人教育にも当てはめるべき社会に出てから必要な生活習慣に関する各種標語も多数掲示され、就業に関するベトナム人の勤勉性を増進させる教育も実施されており、人口構成の若さも含め、今後のアジアにおけるベトナム人の役割の拡大化を窺わせるものでした。



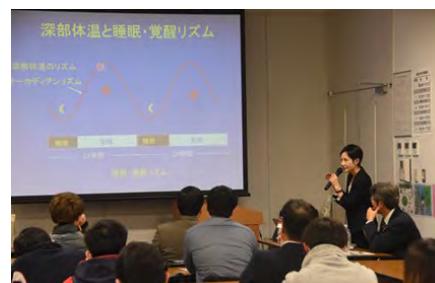
新キャンパスでの交流締結のセレモニーには、仙台大学からは、朴澤理事長・学事顧問、関矢教授(JICA協力・足漕ぎ車椅子研究支援)・入試創職部長、鈴木美生事業戦略室職員(日本私立大学協会国際交流委員会・ベトナム担当協力員)が参加し、首都大学からは、ド・フォン・クオン副学長、ファム・ドン・ドク・スポーツ健康科学部学長、ファン・トラン・キエン・職業教育学部長、グエン・ティ・キム・ソン開発協力化学管理部長、ファム・ティ・ミン総合サービスセンター長、および学生等が参加しました。

<報告：朴澤泰治理事長・学事顧問>

令和元年度 仙台大学第6回学術講演会を開催しました



講演①「睡眠と運動・スポーツ」



講演②「暑さ寒さと睡眠」

令和元年12月4日（水）に本学第5体育館2階大会議室において、仙台大学学術講演会を開催しました。学術講演会は学術会運営委員が企画・運営し、学内外の方々にも広く聴講していただける機会とし、今年度で第6回目の開催となります。

今回の学術講演会は「睡眠と生活・スポーツ」をテーマに、二つの講演を行いました。

講演①では「睡眠と運動・スポーツ」と題し、東北福祉大学教育学部・准教授の水野康氏を講師にお迎えし、スポーツ選手に及ぼす睡眠の影響等のお話しを伺いました。

講演②では「暑さ寒さと睡眠」と題し、東北福祉大学感性福祉研究所・特任研究員の水野一枝氏を講師にお迎えし、温熱環境と睡眠の関係と研究結果に基づく対処方法等のお話しを伺いました。

今回の学術講演会には教職員・学生あわせて約80名が聴講し、会場の大教室がほぼ満員となりました。質疑応答では「競技者にとって最大のパフォーマンスを發揮するために競技開始の何時間前に起床するのがベストか？」など、教員のみならず、学生からの積極的な質問が次々となされ、質の良い「睡眠」を取る重要性を改めて再認識させられる、たいへん有意義な講演会となりました。

学術会では、学術講演会を通じ、仙台大学が学内外に開かれた大学としてより一層「体育・スポーツ・健康」に関わる最新の学術情報を提供できる場であるよう、今後も引き続き尽力して参ります。

<報告：学術会事務室>

芝草通信 NO. 10

担当：体育施設管理コンサルタント 小島文雄

2月（冬）の芝生管理 （暖地型芝生と寒地型芝生）について

この時期の維持管理について記載しますのでご自宅などの芝生の参考にしてください。基本的には1月と同様です。

1. 噴水まわりの天然芝生の維持管理 （暖地型日本芝生）

この時期は、生育期にははつきり見えなかった芝生面の微妙な起伏がわかります。凹凸の状態を記憶にとどめておいて、3月末に例年行っている陸上競技部の実習の時に一緒に実施（陸上競技場インフィールドの芝生の維持管理と兼務）する目砂作業の参考にします。1月の維持管理とほぼ同様です。

- 1) 刈り込み：この時期は行いません。
- 2) 草取り：寒地型の雑草は冬枯れの高麗芝生の中では目立ちますので小さいうちに抜根しましょう。
- 3) 水やり：必要ありません。
- 4) 肥 料：施しません。雑草だけに有効になり逆効果です。
- 5) 病害虫防除：必要ありません。
- 6) エッジ切り：縁石や植え込みとの境目にだらしなく伸び切った匍匐茎をカッターを使って切り落とします。
- 7) シバ踏み：霜柱で芝生が持ち上げられたら、よく踏み固めておきます。

2. 第二グラウンド天然芝生ラグビー・アメリカンフットボール場の維持管理 （寒地型洋芝＋暖地型洋芝）

1月と同様に白っぽい休眠中の芝に緑色の寒地型芝生が混じり、ぶち模様を呈しています。

- 1) 刈り込み～5) 病害虫防除までは同様です。

但し寒地型洋芝には乾燥が続くときは散水が必要になります。

(1月20日記)



写真1. 噴水まわり芝生
寒地型雑草が目立つ 【近景】



写真2. 噴水まわり芝生
寒地型雑草が目立つ 【接写】

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol. 22

担当：今野 桜 新助手

はじめまして、昨年の12月に川平ATルームに配属された今野桜です。私はATC（全米アスレティックトレーナーズ協会認定トレーナー）の資格を持っており、先月から川平ATルームで高校生のサポートをはじめました。

私は生まれも育ちも山形県で、高校を卒業するまでの18年間は山の中でのびのびと育ちました。小学校から高校までの間に約10年間バレーボールに夢中になりました、将来はスポーツに関わることがしたいと思っていた矢先に知ったのがアスレティックトレーナーという仕事でした。私は部活動中に怪我をして、患部が治っていないのに練習を続け、同じ場所を繰り返し怪我するという事が何度もありました。当時は怪我や身体に関する知識を持っていなかったので、練習を休みたくないという思いから無理をしていました。今思うと、当時の自分はもっと自分の体を大事にしてあげるべきでしたし、もしそういった状況になった時に相談できる人が身近にいたら当時の自分は違う選択をしていたかもしれません。高校生の時にATを目指し始め、せっかく勉強するならAT発祥の地でもあるスポーツ大国アメリカで学びたいと思い、高校卒業後にアメリカへ留学しました。最初は全く英語が話せず、ホストファミリーや先生達との会話も一苦労、ATの勉強は想像以上に大変でしたが、無事にウェストバージニア大学を卒業しATCになることができました。卒業後1年間はオハイオ州にある大学でインターンアスレティックトレーナーとして働き、昨年日本に帰国しました。将来は怪我をして私と同じような思いをする人を減らしたいと思っていたので、日本では珍しい高校のATルームで明成高校のアスリート達をサポートできる日々をとても嬉しく思います。まだまだATとしての経験は浅いですが、生徒たちがより良い部活動生活を送れるよう日々頑張りたいと思います。よろしくお願ひ致します。

